

人類は新たな千年紀に入つたが、人類の生存は拡大しつづける地球的な環境危機によつて脅かされている。もし現在のような状態が今後も継続されいくならば、地球は破壊しつくされ、人類だけでなく、生態系もまた存続できなくなる可能性をもつてゐる。

めぐるここ五十年間の人類の歩みは、多くの努力によつて解決してきている部分もあるが、皮肉にもむしろ常に新たな問題を次々に生み、質的にもまた量的にも拡大しつづけていいるといつてもよい。

仏教が描く環境問題の解決への道は、科学技術や経済的あるいは法的な社会的制度の変革のように急進的な方法ではなく、人間の変革による漸進的な方法である。これは教育による変革と同様、迂遠なように見えるが、本質的な変革である。仏教は、科学技術など他の分野の解決方法を否定するものではない。それは何

大乗佛教と環境倫理

唯識思想を中心として
山本修一

れの方法をとつても、常に人間が関わるからである。すなわちどのような科学技術を発達させるか、またどのような経済体制や法的整備をするかは、いずれも人間の営みであるからだ。仏教はその人間自体に解決の道を求めるものである。

これまで、仏教の環境観、自然観など、仏教思想としての環境問題への関わりやそこににおける課題を拙著〔一九九七、一九九八^①、一九九八^②、一九九九^③〕として、まとめてきた。また広く仏教思想と環境問題や平和問題などとの関わりを論じたものに川田（一九九四）がある。本論文では、仏教思想の中でも、特に仏教心理学といわれる唯識思想を取り上げ、環境問題の解決についての意義を議論したい。

一 唯識論と人間、社会、自然環境

(一) 仏教の環境思想

はじめに仏教の環境思想の特徴をまとめるとき、次のようになる。

仏教の縁起としての自然・環境認識は、現在の生態

学の提え方と類似している。すべてのものはどこかで連なっているとの認識である。したがって、自然や生物の多様性と共生の原理こそ、この世界を維持するための第一の原理になる。同時に、縁起の観点から生態系のすべての存在を見ると、いずれも同等の価値をもつていてこと、またあらゆる存在は仮性をもつてることから、すべての存在は尊厳、かつ内在的な価値をもつことにつながる。

また、環境倫理では、人間の権利から自然の権利へと拡張をはかるとしているが、仏教の縁起の観点に立てば、むしろ反対に自然の生存の権利をベースにして、その上に人間の権利が乗っているという構造になる。

仏教における世界認識の一つの視点は、三世間論にあるように、個々の生命体（人間）、生物の集合である社会、そしてその住む環境である。それらを縁起としての関わりの観点から捉えると、個々の人間とその内面である精神との関わり、個々の人間と社会との関わり、そして人間および社会と自然との関わりというこ

となる。

そして、仏教の環境論は、依正不二論や三世間論に見られるように、人間主体的環境論である。これは、「正報なくば依報なし」と表現されるように、主体あつての環境である。また、「正報をば依報をもつて此れをつくる」と環境からの主体に対する影響も当然あり、両者は相互依存的、相互作用によつて成り立つてゐることになる。

しかし以上のような概念は、表面的な意識の段階だけで捉えてしまつては、その本質を見失うことを仏教は主張する。なぜならば、仏教では意識のさらに深層に、広大な無意識の領域があることを明らかにしているからだ。そして表面に現われた意識は、縁起として常にその深層と関わり、表面の意識もまた深層心理も常に流動的に変化していることを明らかにしている。

この考え方は、主体と環境の関わりにおいても同様で、現象として現われる関係性だけでなく、その深層ではさらに密接な関係があることも明らかにする。したがつて、仏教思想では、表層に現われる意識や

(二) 唯識思想の特徴

① 前五識、意識、末那識について

唯識思想によれば、我々が通常意識している部分は、人間のもの感覺器官である目、耳、鼻、舌、身の捉え

の意識（第六識）である。これらが表層の意識であるのに対し、その深層に第七識、末那識の存在を説く。末那識には、種々の煩惱（我癡—無明、我慢—慢心、我見—悪見、我愛—貪欲）がつきまとっている。これらの煩惱には、すべてに我がついているように、自我を守るための煩惱である。すなわち、末那識は、自我意識を支える根源的自我である。また、末那識は別名思量識ともいうが、この「思い量る」対象は、末那識よりもさらに深層にある阿頼耶識であり、これを実体的なものと見ることをさす。そして、そこに執着することを、我執という。仏教で無我説を唱えるのは、実体不変の我があると末那識が執着してしまうがゆえに、そこにさまざまな苦惱や煩惱が生じてくると捉えるからである。

② 阿頼耶識について
この末那識のさらに深層にあるものが、第八識、すなわち阿頼耶識である。横山紘一（一九七六^{〔6〕}）によれば、阿頼耶識には二つの特徴がある。一つは、阿頼耶識が印されることをさす。そしてその刻印された種子は、阿頼耶識の中に貯えられ、成熟し、その結果さらに新たなる存在（器世間、有根身、諸識）を生み出すことになる。その際、身口意の三業がおりなす活動のすべてが種子として阿頼耶識に刻印されていくが、それを総称して名言種子という。これは名の示す通り、言語によって概念化されたものが強く刻印されるところから命名されたものである。また種子は倫理的には善惡無記、すなわち善なる種子、惡なる種子、そして善でも惡でもない種子からなるが、特に善惡に関わる種子を業種子という。仏教では、意識的な善あるいは惡の行為を重視するため、意識的な肉体的精神的行為こそ、善惡の業種子として刻印されることを意味している。また、阿頼耶識そのものは、もともと無記すなわち、いわば倫理的には白紙の状態であるが、それが善惡の業種子によって、色づけされていくことを示している。そしてこの善惡の業種子が、未来世の阿頼耶識のあり方を決定していくのである。

③ 共業と不共業
阿頼耶識に刻印される種子には、家族や民族、また社会を構成する人々にとって共通の業種子もあれば、個人的な業種子もある。これが共業と不共業という概念である。共業は、共通の業、不共業は個人的な業である。個々人の肉体や精神活動は個人的なものであつて、これらは不共業によって形成され、自然環境や社会環境は、自己だけのものではなく、構成する人間社会にとって共通のものであるから、このような共通のものは、共業によつて形成されるとの意味である。このことを、『順正理論』には「山川大地等は共業より生じ、有情の身は不共業より生ずる^{〔7〕}」と述べている。

また共業は、さまざまレベルを考えることができる。例えば、家族における共業は、家族意識や家族的環境を形成し、民族における共業は、民族意識や民族的な環境を形成する。このように共業は、家族、民族、国家、そして人類全体など、種々の表層の社会意識だけでなく、潜在的な意識をも形成しゆくのである。これは人間の縦のつながりにも当然影響を及ぼし、先祖

あらゆる存在を生み出す根源体である」と、そしてもう一つは、阿頼耶識にはさまざまな経験が種子（イメージとしては情報を含む潜在的エネルギーのようなもの）として蓄えられることである。

阿頼耶識はあらゆる存在を生み出す根源体であるとは、自己を取り巻く環境世界（器世間）、自己の肉体（有根身）、感覚・知覚・思考などの主観的認識を行う前五識や意識、またその深層の末那識は、すべて根源体である阿頼耶識から変化して生じたものであることをさす。阿頼耶識は別名一切種子識ともいうが、これは植物の種子がその植物そのものへと成長していく可能性を貯蔵しているのと同様に、あらゆる存在を可能態として貯蔵しているところから命名されたものである。そのため、阿頼耶識は藏識ともいわれる。さらに阿頼耶識は、無没識とも呼ばれ、仏教における生命の永遠流转性の輪廻思想を支える根源体でもある。

また、阿頼耶識には、さまざまな経験が種子として蓄えられるとは、身・口・意、すなわち、肉体的および精神的なすべての活動が、種子として阿頼耶識に刻

から未来世代までに及ぶことになる。ここにおいて、仏教の世界認識の視点である個人の内面との関わり、個人と社会との関わり、そして人間と自然との関わりが唯識論の立場から裏づけされることになる。

④阿頼耶識縁起

一方、阿頼耶識は、識の一つであるため五識などと同様に、その認識対象をもつ。これは、眼識や耳識が色や音を認識対象とするのと同様である。阿頼耶識の場合、その認識対象は、自分が生み出した種子、環境、そして諸識（前五識、意識、末那識）である。そして阿頼耶識は、それらに接するたびに、それらを認識対象として、「触（そく）」、「作意（さい）」、「受（うけ）」、「想（おも）」、「思（し）」という心作用によって認識する。そして、その認識は身口意の三業として行動へと移り、それは種子として再び阿頼耶識に刻印されることになる。これを阿頼耶識縁起といふ。『成唯識論』では、阿頼耶識縁起によつて阿頼耶識が変化する様を「恒に轉ずること暴流の如⁸し」と表現している。

この阿頼耶識縁起の概念から環境問題を考える際に重要なことは、二つのファイードバックループが考えられることである。それは、個人におけるものと、環境との関わりにおけるものである。

阿頼耶識に刻印された不共業種子は、個人の肉体やその五識、意識、末那識をつくり出すが、つくり出すと同時に個人においては、表層の感覺や意識、またその深層の末那識の働きは、常に阿頼耶識に新たな種子を刻印する。その結果、新たに身口意の三業としての行動に移されるとき、再び不共業の種子として蓄積されることになる。こうして新たな不共業が蓄積されることによって、常に阿頼耶識そのものも変化する。ここに個人における阿頼耶識の不共業についてのファイードバックループが形成されることになる。

また、環境は阿頼耶識の共業種子がつくり出したものであるが、ここでも阿頼耶識は、社会や自然環境と常にダイナミックな関係をもち、常に変化し、また新たな共業種子を形成し、蓄積され、再び現象として現われてくるという関係をもつてている。ここに社会や自

然環境との関わりにおける阿頼耶識の共業としてのファイードバックループが形成されることになる。当然のことながら、不共業種子は多くの人々の中で共有されれば、共業種子になる。したがつて、個人におけるファイードバックループと社会や自然環境との関わりにおけるファイードバックループは密接な関わりをもつていることになる。

二 環境問題に対する唯識思想の意義

次に、唯識思想から環境問題を捉える場合の意義を、人間の欲望、環境形成に関する責任意識、そして科学技術の産物の三つの観点から考えてみたい。

(一) 唯識思想からみた欲望

環境問題の原因を南北問題の観点から考へると、北の先進諸国によるエネルギーおよび天然資源を大量に浪費する大量生産、大量消費、そして大量廃棄を基本とした高度消費社会のあり方、また南の開発途上国では、人口爆発と貧困による自然破壊が悪循環を織りな

しているところにある。これから地球社会において持続的開発を可能にする道は、先進諸国における高度消費社会のあり方とそれを支える人間の欲望のあり方を再検討することであろう。

仏教では欲望は意識の表層での欲望と、さらに深層での煩惱を捉えている。意識の表層での欲望は、五識の認識対象である色、声、香、味、触に対する欲望である。これらは肉体の感覚器官を通して引き起こされる欲望、通常物質的欲望といわれるものをさす。仏教の唯識思想では、先に述べたように、末那識の根源的な自我には、種々の煩惱（我癡—無明、我慢—慢心、我見—悪見、我愛—貪欲）がまとわりついているが、この煩惱こそ欲望の本源であるという。仏教では、この四煩惱が意識の表層に現れると、貪欲、瞋恚、愚癡、慢、惡見等の十大煩惱になるという。これらはいずれも自己に対する執着に起因する。

この自己に対する執着こそ、本源的な欲望や煩惱の根源であるが、唯識思想ではさらに、その原因是末那識が阿頼耶識を実体的な自我であると見誤るところに

あるとする。すなわち、阿頼耶識は先に述べたように、縁起によつて常に流動しているものであるが、これを自己の不変の実体と末那識が見てしまうことである。この末那識の自己執着から、本源的自我である末那識を守り、満足させようとする働きが表層意識における欲望として現われてくることを意味する。しかし煩惱は無意識の末那識の次元から突き上げてくるものであり、意識の次元に上らせるることは難しいし、また意識の次元から末那識をコントロールすることはさらに難しいことになる。したがつて、仏教では、心の深層の末那識が阿頼耶識に自己執着を起こすところに真の原因があつて、それを变革しないかぎり、眞の欲望の克服はありえないことを主張する。

環境問題に関わりのある欲望の現われは、物質的なものであり、それは具体的なものとして環境世界に現われてくることである。唯識思想では、先に述べたように、環境世界に現われてくるものは、共業の現われである。これはいわば、人々の欲望などの内面的なものが、阿頼耶識を通じて、まさに環境世界を構成する

社会を構成する人々の共業による。人間だけではなく、他の生物のことを視野に入れた共生を可能にする環境の形成は、縁起的世界の認識と慈悲にあふれた善なる共業によつて形成されてくるであろう。しかしながら、現在の環境のあり様は、人間の欲望だけを充足するような環境の形成へと突き進んできたようと思われる。

環境問題を解決するうえで重要なことの一つは、環境の形成にいかに人間が関わっているかという自覚である。確かに現代の人間は科学技術により多大な力をもち、自然環境を破壊しつくそうとしている。それは

現実に行われている自然開発の様相を見れば一目瞭然であり、これだけでも人間の環境形成に果たす役割の大きさは自覚できるように思われる。しかしながら、現実に環境形成に関わる人間の責任意識を醸成することは、きわめて困難である。それは自己のものとして環境を捉えることができないからである。

唯識思想では、環境世界に現われてくるもの、あるいはどのような環境をつくるかは、共業の現われと捉える。これは、主体である人間によつてこそ環境は形

るものに変わったことを意味している。そしてこの欲望の産物は、五識や意識を刺激するだけでなく、末那識の次元からの煩惱を満たすようになる。それが個人の内面におけるフィードバックループから拡大されて、社会や環境との関わりにおける阿頼耶識のフィードバックループを通じて、その産物はさらに人々の欲望を刺激し、いつそう増幅され、さらには人類全体の共業へと拡大されてきたものと考えられる。こうして、現代社会においては、止まるところを知らないかのように、いつそく人々は貪欲になつていく。そしてそれとともに、環境は人々の欲望を充足させるための物質にあふれてきたと考えられる。

これは、環境からの人間にに対する影響を表わしている。ここで重要なことは、欲望の産物がますます欲望を増幅するように、環境の破壊は結局人間の精神の深層からの破壊につながつてしまふことである。

(二) 環境に対する責任意識 唯識思想によれば、どのような環境を形成するかは、

成されることを表わしている。この思想は、環境認識としてきわめて重要であると考える。なぜならば、環境は自分達が生み出したものであるという認識を培うからである。そうしてはじめて、人間は自己の健康を常に自らの努力で行つているのと同様に、この認識は、環境を健康に保つために努力する意識、そして環境の形成に対する責任意識を養うことができると考えられる。

(三) 科学技術の産物

環境問題に関わりのある欲望の現われは、自動車や化学物質などの物質的なもの、あるいは森林の伐採や資源の採掘、開発などの自然破壊である。その特徴は具体的なものとして環境世界に現われることである。

では実際に環境を破壊している科学技術の産物について、もう少し検討してみよう。唯識思想から捉えた場合、欲望の産物同様、自然を破壊する巨大な機械も、生物や自然を汚染する化学物質も、また生物を殺戮す

るためにつくった農薬も、すべて共業のなせる技といふことになる。人間が科学技術によってつくり出す産物は、唯識思想から見た場合、二つのグループに分けられると考える。

一つのグループは、自然を破壊するための機械や生物を殺戮するための農薬など、自然の破壊や生物の殺戮といったもともと惡の目的意識が伴っているものである。仏教ではこのような意識的な行為を重視する。これらはまさに、惡の共業種子によつて現われてきたものといえよう。そして惡の共業種子の産物は、惡の共業種子をさらに蓄積させるという環境との関わりにおけるファイードバックループを通じて、惡業の種子が一層蓄積されていくことにならう。惡の共業種子が阿賴耶識に多く蓄積されると、善の共業種子は次第に薄れ、その働きを失い、いわば無慈悲な行為が無意識に行われていくようになる。その結果、自然の破壊や生物の殺戮が惡の行為であるという意識さえなくなってしまうのである。したがつて、重要なことは、惡の共業を蓄積していくような産物はつくるべきではないこ

とは人間社会にとつて有用と思われた科学技術の産物が、結果的に自然破壊や生物汚染、人間汚染などの悪の働きをするものであつたことに気づくことになる。確かに自然の成り立ちを十分に理解していない現在では、科学技術の産物の影響を未然に防止することは、きわめて困難であることは十分理解できる。しかしそうであるがゆえに、重要なことは、我々人間は、根源的自我である末那識の次元から貪欲であるために、この世界が縁起的世界であることを十分に理解できない存在であることを深く認識するべきである。我々は、基本的には人間の欲望、すなわち五識や意識の一部を満足させるために多くの科学技術の産物をつくり出してゐるという認識をもつべきなのである。そしてそこに欠けているものは、我々がつくり出す産物が自然や生物にとつてどのような影響をもつくるかの十分な智慧と、できるだけの配慮であることを認識しなければならない。

三 環境運動と菩薩道の意義

とを示している。

もう一つのグループは、大半の科学技術の産物がこのグループに含まれるが、初めから生物の殺戮など悪の目的をもつてつくられたものではない。むしろ人間社会にとつて役に立つものとしてつくられたものであるが、しかしそれらが、結果として自然破壊、また生物の汚染、殺戮、あるいは人間の健康を害するなどの結果をもたらしたものである。これらは唯識思想から考へた場合、環境世界に出ていった場合の影響を人間が予測できなかつたということ、つまり縁起的関係性に暗いことを意味する。

これは、縁起的世界の成り立ちが了解できない末那識に原因を求めることができる。なぜならば、末那識が根源的自我に執着しているかぎり、この世界が縁起的世界としてあらゆる存在が相互依存的、相互作用の関係をもつていることを理解しようとはしないからである。すなわち、科学技術の産物が他の存在にどのような影響を及ぼすのかをあらかじめ考慮しようとはしないために、もともと人間の欲望を充足するためや、ある

これまで人間主体の深層心理である阿賴耶識こそ、個人のレベルでの諸識やあらゆるものをつけり出す根源であり、また社会意識の形成にとつても重要な働きをなすものであることを述べてきた。また、阿賴耶識は常に流動するものであり、変化しゆくものであることを述べたが、変化しゆくものであるからこそ、変革への道が開けてくるのである。

ではこの阿賴耶識を変革する方法論について述べてみよう。ここでは二つの側面、すなわち、表層の五識や意識から深層の末那識や阿賴耶識そのものの変革への道と、意識の深層である末那識や阿賴耶識そのものの変革への道である。これをここでは、前者を社会的次元からの変革、後者を宗教的次元からの変革と呼ぶ。

(一)社会的次元からの変革

社会的次元からの変革は、通常環境運動と呼ばれているものである。運動の主眼は、意識変革にあるが、これを唯識思想から解釈すると次のようになる。環境運動は、環境教育・環境倫理などの教育運動や、また

展示、出版、講演、対話また実際の活動ということになると、これらは唯識思想では、すべて五識を通じて受け入れられるものである。特に、眼識、耳識そして身識である。これらの識を通した環境運動の意義は意識によつてまとめられ、意識化されればされるほど、次への行動の原動力になることは当然である。仏教的にもこうした運動の意義は大きなものがあると考えられる。なぜならば、阿頼耶識こそこうした五識、意識をつくり出す本源であり、また阿頼耶識はこれら五識や意識を認識対象とするからである。ゆえに、五識や意識だけでなく、五識や意識で認識していることは、阿頼耶識でも常に認識されているのである。

阿頼耶識に刻印される種子の代表的なものは、名言種子である。先に述べたように、多くの種子は言語を通して形成され、刻印される。環境運動の教育、対話、講演、出版、展示も当然言語を通して行われるものであるから、運動によつて学んだものは全て名言種子として阿頼耶識に刻印されていくのである。また善惡に關わる種子は業種子として刻印されるが、環境問題の

解決を願う種子や、他の生物との共存、他の民族や国家との共存、自然に対する感謝の念、これらはすべて善なる業種子として刻印されるだろう。そして種子として刻印されたものは、個人のファイードバックループを通して、やがて業報として、現実への行動となつて現われていくし、また社会との関わりにおけるファイードバックループを通して、それらが善なる共業として刻印されていけば、これらは縦には子孫にまで、また横には民族、人種、国家を越えて人類、生物の次元にまで波及していくことになるだろう。したがつて、環境運動は、仏教から見た場合、重要な意義をもつてゐることになる。

(二)宗教的次元からの変革

しかしながら、個人的なレベルでの煩惱は、無意識(末那識)の次元から突き上げてくるものであり、意識の次元に上らせるることは難しい。また環境や社会意識を形成する共業も意識化することはさらに困難である。そこで仏教では環境問題の解決の一つの道として、宗

教的実践としての煩惱や共業の直接的変革をめざすところに求める。ではどのように変革しうるのか。

阿頼耶識は、別名菩薩識ともいう。菩薩識の名の示す通り、阿頼耶識自体の変革をめざす道が、菩薩道である。この菩薩道の基本的精神は、『法華經』法師品にあるように、「慈悲」、「忍辱」、「空」である。まず「慈悲」はあらゆる人間、動物、植物、また非生物に対しても平等に、さらに善惡を選ばず及ぶということである。「忍辱」は、あらゆる困難に立ち向かう根源力、また「少欲知足(欲少なくして足を知る)」の実践が、貪欲を制御する倫理性を培うことになる。最後に「空觀」は、縁起としてあらゆる生命との関係性を重視し、すべての生命との共存を願う地球生命意識を養い、また相依相関の生態系のあり方に対して感謝、報恩の精神を培うことになる。菩薩道はこのような精神に立つての実践である。そして、菩薩のもつ智慧は、先に述べた阿頼耶識における不共業としての個人のファイードバックループや共業としての社会や環境の関わりにおけるファイードバックループを知っているだけでなく、こ

菩薩道の実践による智慧と慈悲のエネルギーの蓄積は、阿頼耶識に善なる業種子を蓄積する。そして善種子が多く刻印されるにつれて、阿頼耶識は大円鏡智となるのである。大円鏡智は縁起の智慧として、おおいなる円鏡に万物をすべてありのままに映し出す智慧である。これは縁起の智慧であるゆえに、自己の成り立ちに関わるすべての存在に対する感謝と報恩の思いがわき出てくる。そこにはおのずと共生と共存を願う地球意識も培われることになる。

また、阿頬耶識から出てくるほかの諸識、すなわち末那識は平等性智として、意識は妙觀察智として、五識は成所作智として、それぞれが智慧に転換してくる。平等性智は、末那識が阿頬耶識を実体視し、そこにある源的自我があると思い誤っていたわけであるが、いの智慧はその執着から解き放たれ、（小）我への執着を断つことを可能にする。こうして欲望の根源である我愛などの煩惱から解放されることになる。さらに、平等性智はすべての存在を縁起によつて成り立つ存在として了解し、すべての存在の価値を平等なるものとして把握する」とを可能にする。そして仏教の慈悲の働きが発現していくことになる。

妙觀察智や成所作智は、煩惱にくもらされる」となく、理性を働かせ、的確な判断や適切な推理をする能力を得、そのような意識の命ずる通り身体の能力を發揮できることになる。これは意識や五識次元の物質的欲望を克服することにつながるし、またあらゆる生物との共生や共存を可能にするための科学技術の発達や行動を促すことになるだろう。

こうした宗教的次元の阿頬耶識の変革と社会的次元からの阿頬耶識の変革は、ともに相まって、個人における不共業の変革だけでなく、共業の変革へつながり、それはやがて環境問題への解決へつながつてくると考えられる。

文献

- (1) 山本修一、「環境思想への仏教の寄与」、『東洋学術研究』第三十六巻第一号、一九九七年、五七一五八頁
- (2) Shuichi Yamamoto, "Contribution of Buddhism to Environmental Thoughts," *The Journal of Oriental Studies*, vol. 8, Tokyo: The Institute of Oriental Philosophy, 1998, pp. 144-173
- (3) 山本修一、「環境倫理と仏教の課題」、『印度学仏教学研究』第四十七巻第一号、一九九八年、七八一八四頁
- (4) 山本修一、「環境倫理と仏教の課題(1)」、「印度学仏教学研究」第四十八巻第一号、一九九九年、二五〇一二五六頁
- (5) 川田洋一、「地球環境と仏教思想」、第三文明社、一九九四年
- (6) 橋山経一、「唯識思想入門」、第三文明社、一九七六年

- (7) 『順正理論』卷三十三、大正藏二十九卷、五一九頁
 - (8) 『唯識三十論頌』、大正藏三十一卷、六〇頁
- (やまとみどり しゅうういち／創価大学教授)